



クラスメイトの

ブロンド留學生は

どろ
どろ
隠れオウ

らしい

小説 舞麗辞 | story works MYRAGE

挿絵 しまちよ | illustration works SHIMACHIYO

立ち読み版

プロローグ	英国からの留学生はブロンド・碧眼・おまけに美少女!!	006
第一話	美少女留学生のヒミツ!?	025
第二話	HENTAIは今や世界の共通語!?	062
第三話	いけない★ソフイー先生!!	126
第四話	美少女騎士、コスプレ会場に立つ!	177
第五話	運命の夜 — The night of destiny —	195
エピローグ	DRAGONへの道 (てゆーかむしろ未知……)	246

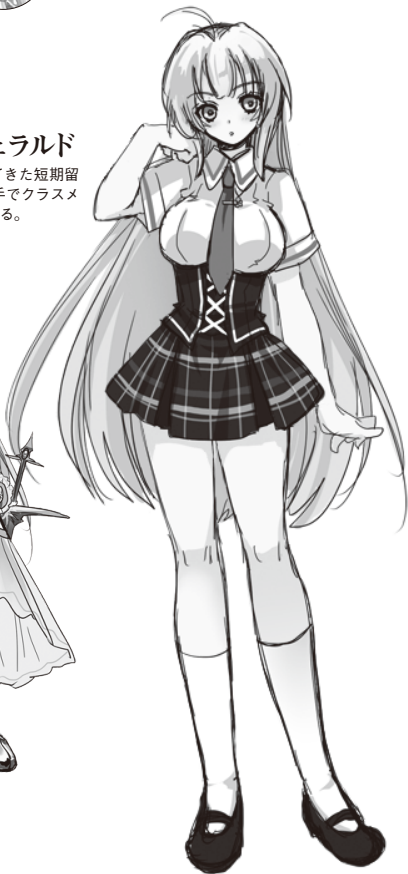
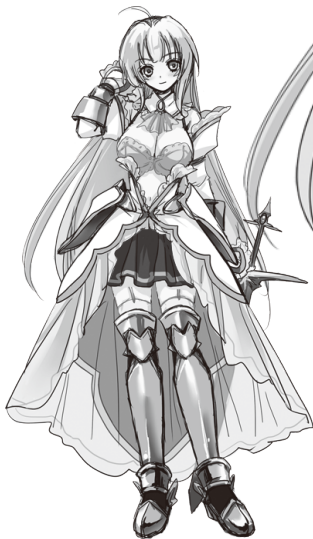
登場人物紹介

Characters



ソフィア= フィッツジェラルド

イギリスからやってきた短期留
学生。日本語も上手でクラスメ
イトにも慕われている。



さわ きりゅういち

沢木 龍一

隠れオタな少年。絶賛ハマリ中のアニメの
ヒロインに似るソフィアに憧れていて…。

(でもそっか、きつとソフィアはもう経験があるんだ。欧米は性に大らかだっというもんな……ってことはソフィア、案外こういうことに慣れっこなのかも……)

それなら避妊薬を常備しているというのも、ここまでの彼女が見せた意外なまでの積極性も腑に落ちる。自分にとっては人生の一大事だが、彼女にとっては日本におけるひと夏の思い出づくり、程度のことなのかもしれない。

そう考えるとなんだか肩の力が抜けた。そして自分がその『思い出づくり』のお相手に選ばれた幸運ににわかに胸が高鳴る。

(ソフィアが初めてじゃないのはちよつと悔しいけど……でも、僕の初めての相手が、あのソフィアになるんだよな……!)

何にせよ好かれてるのは事実、そう思うと何にも増して興奮と幸福感が先立った。

「そつ、それじゃ——!」

覚悟を決めた龍一は既にお迎えの姿勢となつている留学生へ飛びつくように身体を重ねると、彼女の脚の間に身体を入れ自身の先端を彼女の入口へと近づけてゆく。

しかしそこからが大変だった。

「あつ、あれっ……?」

いざ挿入しようとして片手で勃起を支えつつ少女の入口に誘導を試みるものの、慣れないため空間把握能力がうまく働かない。肉の切っ先は的の前後左右を幾度も突き、柔らかい肉に押し戻されてしまう。しかも焦れば焦るほど空回り、更に上滑りを繰り返してしま

った。

「んっ…リユーイチ…ココ、だよ？」

見兼ねたソフィアが助け舟を出してくれた。少女は自らの腕を太腿の後ろから回すと、濡れ綻んでいるとはいえ一筋のクレヴァスでしかない目的地の左右にそれぞれ指をあてがい柔肉を押し広げて、再びむにいつと局部を大きく割り広げてくれた。

「そのままゆっくりまえにきて…リユーイチ、わかる？」

「うっ、うん…」

少女の誘導に従い腰を前へと進めていくと今度は一発で、潤いに満ちた粘膜の感触を亀頭が捉えた。くちゅり、と泥濘に掌を浸したような濡れ音が響く。

(うあつ、熱いつ?! ソフィアのアソコに、僕のが当たってるっ…!!)

敏感な陰茎の先で感じる姫口は指で触った時より数段熱く燃え盛り、ぬめりを湛えていて。まるで粘膜が亀頭に吸い付いてくるかのようなうだ。

「そう、そのまままっすぐ…んうっ!!」

言われるがまま腰を前に迫り出してゆくと、それまで冷静な口調でナビゲートしていた少女の声が跳ねた。

「ごっごめん、乱暴だった!？」

慌てて腰を引こうとするが、ソフィアが腕を掴んでそれを制する。

「だいじょうぶ、だから…それよりはやく、おくまできて」

言ってソフィアはこちらの首へと腕を回し、向こうから引き寄せてくる。

「うっ、うん…それじゃ、いくよ——」

龍一は促されるまま、角度を調整し体重をかけるようにして一気にソフィアを刺し貫いた。

ズブっ…ズブズブズブウウウ——ツツツ!!

途中で何かが行く手を遮るも、気にせず奥へ腰を繰り出すと、やがて抵抗は弾けるように消え失せてそのまま一気に根元まで飲み込まれていった。

「くううんうああっっ!!」

瞬間、少女の口から声が溢れる。それと同時にペニスが搾り取られるように腔肉がわつと押し寄せてきて肉茎を締め付けた。

(うわあっ、熱いっ…やけど、しちゃいそうっ…!!)

少女の胎内はとにかく熱く、窮屈で。しかし同時にとてつもなく柔らかだった。内側の肉は潤みきつていて、軽く身じろぎしただけでペニスにゆるりと蜜が絡んで得も言われぬ喜びを引き起こす。

「くうっ…すごいよ、ソフィアのなかっ…ギユウギユウ締め付けて…くるっ!!」

自分の感じている快感を彼女にも伝えたくて、少年はソフィアの顔を覗くが。

「!? ソフィア…大丈夫っ!」

少女の相貌を確認した途端、龍一はびっくりしてしまふ。だって彼女ときたら。先ほど

までの紅潮が嘘だったみたいに顔を青褪めさせており、おまけにその目には涙まで滲ませたのだ。それは決して潤んでいるとかではなく、明らかな涙目だった。

(な、なんでこんなに辛そうなんだっ!! なんかやり方間違えたのか——!!)

そう思っ腰を引きながら結合部へと目をやると。

「えっ!!」

そこを一目見た少年は思わず絶句してしまった。二人が繋がるその場所からは先ほどから湧き上っていた淫蜜に混じって、朱色の滴りが見て取れたのだ。

「えっ…あつ、もしかしてソフィア…:…:こういうことするの、初めて——!!」

龍一が半信半疑でそう尋ねると、

「あつ、あたりまえ…:でしょ!」

ブロンド髪の処女は痛みを紛らわせるためか少しだけムツとしたような口調でそう返す。
(うそ、だろ…:…:もしかして僕、とんでもない勘違いを——!!)

軽い気持ちで女の子の処女を奪ってしまった——彼女が初めてだったら嬉しい、と思っていた龍一ではあるが、実際破瓜はかしたソフィアはとっても辛そうで。龍一は喜ぶより先に取り返しのつかないことをした、という後悔に苛さいなまれる。

「ごめんソフィア、ほんとにゴメンっ…:…:僕、そうだったって知らなくて——」

欲望に任せて彼女を傷つけてしまったことが申し訳なくて、少年は慌てて少女を気遣う。
「んっ…:ホワイ? リューイチ…:どうしてあやまる…:の? ワタシ、リューイチにヴァー

ジンあげることできて……とっても、うれしいのに」

しかしソフィアの方はといえば痛みを堪えながら、呻きに途切れ途切れの言葉で。それでも無理に笑顔を作つて龍一を安心させようとしてきた。

「ぼっ、僕とで……うれしい、の？」

信じられない言葉を口にした少女にその真意を尋ねると、

「あたりまえ……でしょ……ワタシそんなBITCHじゃないもの。ほんとうにすきになつたひととしかこんなこと……しないよ♥」

甘い告白と共に少女は龍一の首に手を回し、やや強引に唇を重ねてきた。

(じゃあ……さっきの好きつて、そんなに強い好き、だったんだ——!!)

彼女の自分への想いの強さを知つて、龍一は胸の芯がジンツツと痺れるのを感じる。

「んぶあつ……ごめん、ソフィア……痛いんだよね？ このまま動かないでいようか？」

本心は腰を振りたくて振りたくて堪らない。疼く肉茎を柔らかな肉壁に擦り付けて思のまま喜びを味わいたい。だけど彼女が初めてと知つた以上そんなことできるわけがない。龍一はもう心配で心配で。今にも勝手に動きだしそうな疼き腰を必死になつて抑えつつ、少女のブロンド髪を撫でて優しく声をかける。

「んっ……だいじょうぶ……すこしいたい、けど……リユーイチとこうしていられることのほうが、ずっとずつとうれしいから」

明らかに破瓜の痛みに震えているのに。ソフィアはなおも笑顔のままそう応える。

(絶対痛いくせに…そんなにまで、僕のこと——!!)

「ソフィアっ…ソフィアッ!!」

ぎゅううっ!!

その姿がいじらしくて、どうしようもないほど愛おしくて。龍一は彼女を強く抱きしめた。

「きゃっ、どうしたのリュウイチ!？」

「ソフィア! 僕もソフィアのこと…大好き、だよっ!!」

唐突すぎるいろいろな意味で順番が逆だ。しかし彼女の姿を見てみると、どうしても告白せすにはいられなかった。

そんな空気を読めない少年の告白にもソフィアはこれ以上ないほどの笑顔。

「ホント!? うれしいっ…リュウイチ♥ もっともっと、ギュッてして?」

彼女もまた龍一の背中に腕を回し、ますます激しく抱きついてきた。

「リュウイチ、がまんしてるでしょ? だいじょうぶよ…いたいの、すこしずつだけどへいきになってきてるから…それより、もっとリュウイチのこと…かんじたいもの♥」

留學生はそう言うや、自らお尻を浮かせるようにして腰を軽く前後に揺さぶり更なる抜き差しをねだってくる。

「うあっ…むっ、無理しちゃだめだよソフィア…!!」

はしたないおねだり攻撃に腰が砕けそうになるものの、その言葉通り彼女の表情は先ほ

どより随分と苦悶の色が薄まっているように見える。

(この調子なら、ちよつとずつだつたら動いても大丈夫そうだな……)

それならばと龍一も抽送を再開させた。それでも腰の動きはできるだけ緩慢に、彼女の粘膜をこれ以上傷つけることのないよう気を配る。

(うああ…ソフィアのなかつ、ぬちゅぬちゅしててすごい気持ち、いい…でっ、でも今は優しく、優しくしてあげなくちゃ……!!)

想いを寄せる相手との初体験でそれは苦行にも等しかったが、腕の中の少女のためと必死で堪えながらじつくりと、緩慢に交わりを続ける。

そうしていると粘膜と粘膜の擦れあうたび、わずかずつだが水気を帯びたヌチュヌチュという音が結合部から鳴り始める。

(あ、ソフィア……濡れてきて、る……)

陰茎にまとわりつく愛液のぬめりもたらす喜びに少年が息を呑む。彼がそれを察知して間もなく、ソフィアの反応も変化し始めた。

「んっ、あつ、あうっ…んうう……」

痛みを堪えるような浅い息遣いの中に、甘い喘ぎが混じり始めたのだ。

「ソフィア…きつ、気持ちいい…のっ？」

自身も快感に翻弄されながらも龍一が少女にそう確かめると、

「んっ…うんっ、すごいっ…いい…のっ…んアッ、ひっんう…んふああっ♥」

龍一の問いかけにソフィアは何度も頷き、更に強く抱きついてくる。重なる二人の間でぶんにゆりと柔らかな乳房がひしゃげた。

(胸：触っても、いいかな)

彼女も快感を感じる場所の多い方が痛みが紛れるかもしれない。柔らかくも温かな感触に誘われて、龍一は密着する少女の胸元へと手を滑らせる。

「ひゃっ…お、おっぱいっ…!!」

突然のことに少女が咄嗟に腕で自分の胸を庇う。

「だめ？」

少女の手の甲を撫でながら甘えるように問いかけると、

「…いいよ♥」

少女は恥ずかしそうに視線を外しながらも、自らブラウスのボタンを外し前をはだけた。彼女は着痩せするタイプなのか、ブラジャーに包まれた胸元は制服の上から見た時以上にたわわで、軽く紅潮し桃色に染まった胸の谷間はじつとりと汗ばんでいた。

ホックを外そうと手を彼女の背中に回すと、軽く背中を浮かせて作業がしやすいようにしてくれた。指が震えてなかなかうまくいかないが、何度か試みているうちにどうにかホックを外すことに成功する。

ぷるりゆんっっ♥

窮屈な締め付けから解放された途端、少女の乳房は突然一回り巨大化したかのごとく、

ブルンツと弾けるように踊った。

そのままブラを引き剥がすと、そこには雪色の乳峰が二つ並んで聳そびえていた。

(ソフィアのおっぱいっ……上向いてすごいキレイ……っというかエロいっ!!)

仰向けの姿勢にもかかわらずソフィアの胸は綺麗なお椀型を保っており、呼吸に合わせてプリンみたいにフルフルと弾んでいる。先端付近は綺麗な桜色で、頭頂部に実った小豆大の乳頭は既に充血し硬くしこっていた。

乳首、勃起してる——それを見た龍一は夢中で乳果実へとむしゃぶりついていた。

はむっ！　ちゅうっ、ちゅうっ、ちゅうむっ、ちゅうううう——　つつ!!

「ひあっ、おっ、おっぱいそんな激しく吸ったらあんっ、んああああ——　ツツ♥」

敏感乳首に吸い付かれたソフィアはいいやいやをするようにブロンド髪を振り乱し恥じらう。しかしその喘ぎからも彼女が感じているのは明らか、その反応に勇気を得た少年は本格的に少女の胸を貪り始めた。

空いている方の胸は掌でぐにゅぐにゅと揉みこねつつ、指で勃起乳首を摘み上げ紙こ縫よりを作るみたいにクニクニとこね潰す。指の腹で、あるいは舌先で。少女の乳頭がビクビクと充血を繰り返し、より硬く大きく成長してゆくのがわかった。

(もっ……もっ……とソフィアを気持ちよくしたい、ソフィアのこと感じたい……!!)

龍一は両胸を左右から寄せ、両方の乳首をいっぺんに口へと頬張ると、二つの敏感突起を舌で舐め転がし、あるいは激しく吸り込む。



その言葉に少年は舌を這わせるのをやめると、これでお開き——とばかりに今まで以上の風圧でフツと美尻へ吐息を吹きかける。

「んうあっ♥」

気化熱に舐められた放射皺はキュンツと窄まり、しかしすぐに更なる刺激を欲してヒクヒクと淫らに収縮を繰り返す。

「ああ…ごめんなさいリユーイチ…おっおシリい…リユーイチのしたでっ…してっ、なめてほしいのっ…!!」

少年のダメ押しに根負けしたソフィアはどうとう変態的な欲望を暴露。そればかりか天高く掲げた白桃尻を少年の顔にぐいっと押し付けてきた。

「んぷっ!! ぷわっ…もうっ、ソフィアは本当にヘンタイさんだなあ」

すかさず少女をあげつらいながらも、龍一自身待ち焦がれていたアニリングスだ。少年は押し付けられた桃尻に再び顔を埋めると、放射皺の中心に喜び勇んで舌尖を差し入れた。

「ひうんっ♥ んおっ、んあはあっあああ…♥」

途端に少女の艶やかな尻肌が粟立ち、左右の桃尻が痙攣するようにピクピクと震える。「お尻舐められるの、どう? 気持ちいい?」

美尻に舌を這わせたまま少女の顔を覗き見ると、

「んっ、う…んっ…そのっ、すぐくすぐったくて…はずかしくてえっ…でもそれいじょうにとつても…きもちいい、のおっ…!!」

肛門舐りを受けるソフィアは骨抜きにされたように頬を弛緩させ半開きの唇をぱくぱくと開閉させて恥悦に酔っていた。

「こっちもすぐく美味しいよ? どんな味がするのか聞かせてあげようか?」

「やああんっ…そんなっ、いじわるいわないでええっ…:♥」

すんっ、と鼻を吸り拗ねながらも、ソフィアは自らの巨桃を少年の顔にぐりぐりと押し付け続ける。桃孔も最初は少し硬さが残っていたものの、舌で優しくマッサージしてやるうちに蒸した桜餅みたいに柔らかく緩みだした。

ぬりぬりぬりゆと中の方まで舌を捻じ込んでゆくと、括約筋が舌をきゅうきゅうと締め付けた。内側で沸き立つ熱い桃粘液に、舌先が火傷してしまいそうだ。

「んああ…リユーイチ…もうがまんできないのっ…おねがいつ、いつ、入れて…:!!」

ネチネチとアナル舐めを繰り返していると、やがてソフィアがか細い声で懇願してきた。「挿入れてほしいって…:どこに?」

その言葉を待ってましたとばかりに龍一が問い返す。

「どっ、どこって…その、アソコに…:」

「アソコって? お尻の穴かな…そんなにコッチが気に入っちゃったの?」

わざとらしく言いながら、龍一は舌をぐりぐりと肛門深くまで差し入れようとする。

「ひんっ、ちがうううっ…だっ、だからあ…:!!」

ソフィアは言い淀んでいた。留学生とはいえヒトのHENTAIMANGAを盗み読み

しながらオナニーするような娘が、ソコの呼び名を知らないわけがない。むしろ知りすぎているからこそ、口にするのが恥ずかしいのだろう。

(けど、だつたらなおさらソフィアの口から聞いてみたい！)

「ほら、ちゃんと言わないとしてあげないよ？」

今すぐにも交わりたい気持ちをひた隠しにしてそう迫ると、少女もとうとう観念したように潤んだ瞳をギョツと瞑る。

「おっ：おま○こっ：ソフィアのおま○こに、リユーイチのが……ほしいのっ!!」

やはり彼女、それが恥ずかしい言葉であると認識しているようで淫語を口にした瞬間、膣口がキュウツと淫らに口を窄ませそこに溜まっていた蜜液が尻谷間からよだれのようについつと一条の雫を零した。

(すごいっ、ソフィアがおま○こだつて……えっ、エッチすぎっ!!)

「それじゃ挿入^いれてあげるね」

「はっ、はやくっはやくちようだいよおおっつ!!」

待ちかねたように懇願しながら、恋人が挿入しやすいよう掲げた腰を一旦下ろそうとしたソフィアだったが――。

ぐにゆういいいい……!!

彼女が尻を下げるより早く、龍一は天井を向いたままの陰裂へ指を二本押し込んでいた。「ひんうっ?! リユーイチ、なにしてるのおっ?!」

「指を挿入したんだよ、見ればわかるでしょ……すごいソフィアの膣内、ぐにゅぐにゅしててとってもエッチだよ」

ソフィアの抗議もどこ吹く風、少年は人差し指と中指で濡れそぼった姫割れをぐちゅぐちゅとかき回し、ほじくり返す。

(一度こうして女の子のココを指先でじっくり探検してみたかったんだよなあ……!!)

それにもうちよつとだけ、彼女を焦らして苛めたかった。膣内は指が火傷しそうなほど熱い。肉がみっちり詰まっており、粘膜質の肉壁がぐにゅぐにゅと絶えず蠢いていた。

少年はゆつくりと指を抜き差ししつつ、恥丘の端で皮を被ったままの陰核を親指でマッサージし始める。

「ああうっ♥ そこっ…あんまり強く揉んじゃやっあううっ……!!」

クリトリスへのイタズラに抗議しつつも、元より挿入をねだっていたソフィアとしてみれば指の刺激でも待ちわびたものだったらしく、おとなしくされるがままになっている。

従順な恋人の反応に勇気を得た龍一は、しばし指の抜き差しを繰り返し、うねる肉壁の淫らな蠢きやしゅぶりつくような膣圧を楽しんだ。

くちゅっ、ぬちゅっ……指の刺激に肉壺がますます蜜を潤ませだした頃。やっぱり細い指の刺激だけでは満足できなくなったらしく、

「んああ…リユーイチいいっ……もう、いじわるしないでっ、そろそろ……」

ソフィアが再び少年に懇願の視線を向けてきた。

「そろそろ、なあに？ 入れてほしいって言うから指、入れてあげたのに」

本当は今すぐにでも犯したい衝動を抱えながら、それでも龍一は冷静を装いくちくちと抜き差しの速度を弱めながら少女の心と身体を同時に責め立てる。

「んひいいい……リユーイチイジワルすぎ……ゆびじややなのっ！ おちんちんっ！！
リユーイチのおちんちんで、ワタシのおま○こぐちゆぐちゆしてえっっ！！」

おあずけに耐えかねたソフィアはどうとう、恥も外聞もなくそう叫ぶ。

「こっ……コレが欲しいんだ？」

とうとうソフィアを籠絡した——龍一はサディスティックな興奮に震える手を叱りつけ、ようやくズボンとパンツを下ろす。そうやって既に勃起しきったペニスを取り出すと、ブロンド少女の目の色が変わるのがわかった。

「ほしいっ！ おちんちんおま○こにほしいのっっ！！ おま○こっおま○こおおっ！！」

臨戦態勢の勃起を前に少女は喉を鳴らし小鼻をひくつかせてベッドへ仰向けに寝転んだ。脚は大股開きのまま、自分で大陰唇に指を添えてくぱっつと左右に割り開く。

「ほらっ、こっこここにいらてっ！ リユーイチのおちんちんおま○こにいらてえっっ！！」
開かれた膣前庭にぼっかり開いた膣口は絶えずひゅくひゅくと蠢いて、彼女の懇願通り一刻も早く龍一のペニスを咥えたがっているかのようだ。

「そんなにがっつかなくてもすぐっ、すぐに挿入してあげるよっ……！！」
（やっ、やっと挿入られるんだ……ソフィアっ、ソフィアの膣内に——！！）

自分で焦らしておきながら、龍一の方だつて彼女と交わりたくて仕方ないのだ。はやる気持ちで腰を重ねると、すかさずソフィーが彼の尻へと脚を絡めてきた。抱擁にも似た彼女の足に引き寄せられて、少年の剛直は燃え盛る陰裂へずぶずぶと飲み込まれてゆく。

「あっ……はあああ……んはああああ………♥」

ズンツ……亀頭が膣天井を打つた瞬間、ソフィーが恍惚の表情を浮かべた。桜色をした少女の頬が一気に弛緩するのが目に見えてわかる。

（うああ……ソフィーの膣内ぐちゅぐちゅに蕩けてるっ……すっすっすごい気持ちいいっ……!!）

一気に理性を剥ぎ取るような膣肉のもてなしに、龍一は彼女の細い腰をがっしりと捕まえる。その時一瞬、破瓜の苦痛に喘いでいた彼女の悲痛な表情を思い起こしたものの、

（でも指入れも悦んでたし、初めての時みたいに痛がったりはしない——よね？）

腕の中で乱れるソフィーにそう確信した龍一は、のっけからフルロットルで腰を使う。

ばんばんばんばんばん!!

「ひゅんっ♥ すごっ、リユーイチのおちんちんかたいっ、かたああいつっ!!」

すると思つた通り、ソフィーはすぐさま抽送の喜びを受け入れてくれた。そればかりかさかりのついた牝猫みたいに吠えながら、両手両足を激しく龍一の身体へと絡めてくる。

「リユーイチっ、リユーイチ……好きっ、だいすきいつ♥」

ぐちゅぐちゅと下品な結合音を奏でながら、二人は夢中で快感を貪りあう。汗ばんだ白磁の肌を龍一が舐め上げれば、ソフィーの方も負けじと少年の首筋にキスの雨を降らせた。

(こうやって抱き合いながらエッチするのって、いかにも恋人同士って感じだよな) 愛しあつてる、と実感しながらのセックスは身体だけでなく心まで気持ちいい。むっちりとしたお尻を捕まえズンズンと深いストロークで肉穴を貫くと、

「ふわああうっ、リユーイチツッ：りゅーいちいいっ……：♥」

艶かしい喘ぎと共にソフィアがますますぎゅっと抱きついてきた。更に少女もぐいぐいと腰を前後させ始め、抜き差しをより深いものへと変えてゆく。

(うわっこれ気持ちよすぎっ：けど、このままじゃすぐイッちゃいそうっ……!!)

挿入したばかりだというのに陰囊が疼き、輸精管が痙攣を起こしたみたいに蠕動ぜんどうしている。このまま続けたらとても堪えられそうにない——すぐそこにまで迫った射精の予感に、龍一は慌てて少女の脚を振りほどき陰茎を泥濘から引き抜いた。

「んひゃあああ!!」

にゅごぽおおっ……龟头を完全に引き抜く瞬間、カりに引っ掛かった肉褌がめくれ上がって桃色の膣肉が外気に晒される。粘膜壁はひくっひくっひくっひくっとして脈動するように蠢いており、その様子はせつかく捕らえた獲物を奪われた肉食獣の喘ぎのようだ。

「やああっ、なんでやめちゃうのっ!! イッてない、まだイッてないのにいつっ!!」

ようやく与えられたペニスをいいところでおあずけされて。ソフィアは幼子がいやいやをするように首を左右に振りたくり、あまつさえその碧眼に涙まで滲ませている。

「ごめんごめん。すぐに入れてあげるから——四つん這いでこっちにお尻向けてみて?」

早漏だと思われたくない龍一は掌に残る柔尻の感触を思い出し、咄嗟に体位の変更を要求してごまかす。

「するっ、よつんばいするからっ…はやくっいれて…おま〇こっ、おま〇こおっ♡」

すると少女はご主人様の命令を受けた飼犬みたいに、仰向けの身体をすぐさま反転させて恋人に尻を向け獣のポーズを取る。そうして少年に肉桃を突き出すと、

「ほらリユーイチはやくきて♡ わんっ、わんわんっ♡」

どうにか彼の気を惹こうと、学園のブロンドアイドルは健気に犬真似まで披露。尻尾を振る代わりにその可愛らしいヒップを右に左にとふりふり踊らせて挿入をねだってきた。

(うわぁソフィアエッチすぎっ…犬真似可愛すぎっ!!)

「いつ、挿入れるよ——今度はっ、今度は射精すまで絶対やめないからっ!!」

堪らず背後から襲いかかり、白桃尻を抱えると一気に根元まで刺し貫く。

ズブズブズブらうう——っ!!

「ふわぁあんっ♡ すごひいつ、リユーイチの…おくまでとどくらうっ♡」

深い挿入に少女の声が一気に蕩けた。しかしそれは龍一の方とて同じこと、

「っあ…ソフィアのもっ、すごいつ僕のに絡み付いてくるよっ…!!」

正常位の時以上に竿をみっちり包み込む膣肉の食い締めにもたも一瞬で射精寸前まで追い込まれた少年は、挿入からしばらくの間腰を動かすこともできずに雪色の桃房を抱えて身を硬直させ刺激に慣れねばならなかった。

しかしそんな彼の事情など知る由もないソフィアは、

「んふあうう……り、リユーイチのイジワルうっ……はやくっはやくうごいてよおお！」

少年の沈黙を自分への焦らし責めだとも思ったらしく、突き上げた尻をくんっ、くんっ、と上げ下げして抜き差しを懇願する。振り向いた肩越しに見せるその表情は蕩けきり、半開きの口端からはバテた犬みたいに桃色の舌がだらりとはみ出していた。

(うわっ……ソフィアってば、ほとんどアへ顔だよ……！)

淫悦にだらしなく緩みきったその顔は、いつものすまし顔からは想像もつかないくらいに淫らな牝の顔だった。

こんな状態の彼女を放置するなんてさすがにかわいそうすぎる。龍一は括約筋を引き締めてこみ上げる射精欲を抑え込むと、

「それじゃ動くよ——!!」

ばんっ、ばんっ、ばんっ、ばんっ!!

ツンッと突き出した美尻に力いっばい腰を打ち付けだした。若々しい二人の肉がぶつかりあう小気味よい肉音が部屋中に反響し、そこに少年の吐息と少女の喘ぎがアンサンブルのように重なってゆく。

「ひゅんっ♥ すごっ、ワタシリユーイチとこーびっ、こーびしてるっ♥♥」

ソフィアは例によってHENTAIMANGAで覚えたと思われる淫語を吠えながら激しく腰を振ってくる。その様は確かに彼女の言葉通り、発情しきったメスとの交尾だった。

彼女の言葉に龍一は今更ながら、ケダモノじみたドギースタイルで恋人を犯していることに興奮を覚え、尻房を鷲掴みにしつつ打ち込むような腰振りで金色の牝を責め立てる。

とはいえこちらも童貞卒業以来初めてのセックス。激しい抜き差しを繰り返すうちに、一旦は遠のいていた射精の予感が先ほど以上の速さでこみ上げてくる。

しかしやつぱりまだ早い。このままでは自分だけ果ててしまう——そう考えた龍一は、
くにつ……ぐにいい……!!

「んふあわわあっ♥ やっ、おしりいいっ!!」

夢中で腰を使っていたソフィアが素っ頓狂な声をあげる。龍一が親指を彼女のアナルに差し込んだのだ。先ほど舌でほぐしておいた美肛はあっけなくくらい簡単に少年の指を第一関節まで飲み込んでいた。

「そんなっハンソクっ……にあなっぜめ、なんてえええ……♥」

前を貫かれながら後ろの孔まで弄ばれて。少女は一気に快感のボルテージを上げた。その背中では総毛立ち、白桃尻がびくんびくんと痙攣したように踊っている。ペニスを啜える腔洞も、雑巾を絞るみたいに勃起へと食いついてきた。

「くああっ、ソフィア……すごい締め付けっ……!!」

痙攣痙でも起こしたかのような激しい収縮に呻きながら、龍一はソフィアの排泄孔に指を挿入したまま雪色尻を両手で鷲掴み一気にラストスパートをかける。

パンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッ!!

「ひやめつらめええ…ンオお…いくつ、ノオオ…もおつもおおおお…!!!」

彼女の絶叫と狂ったようにヒクつく膣壁に恋人の限界を感じた少年も、堪えることをやめて一気に上り詰める。

「だっ射精すっ…ソフィアっソフィアの膣内にいっぱい射精すよっ…あああつっ!!」

「ひういううんっワタシもお…イクツ、いくうっ、いっちやううう—— ツツツ」

ずくんっ!! 腰を一際強く打ち込んだ瞬間、蕩けあう二人の性器は同時に絶頂を迎えた。

びゅぶるっ!! びゅくんっ、びゅくっ、びゅるっ、びゅびゅびゅうう—— ツツ!!

初体験以来溜め込んでいた白濁は子宮口を穿つほど強い進りで、少女の胎内を白濁のマグマで満たしてゆく。

「ンああああ…あついのオっ!! リューイチのがおなかにっ、プッシーのなかつりゅーイチでいっぱいになつてるううっっ」

精を受けた肉壺の方もまた、陰囊の全身全部を搾り取るうとでもいうようにキュウキュウと肉根を締め付けて捕らえた牡をしゃぶり尽くした。

「ああ……すごい……すごく、きもちよかつたよ…ソフィアっ…」

尿道に残る残滓一滴までを少女の胎内に注ぎきつた龍一は、甘痺れする腰を叱りつけペニスを引き抜こうとしたが、寸前に少女が掌を回しそれを制した。

「だめっ、まだきもちいいのつづいてるのっ…だからもうちよつとこのまま……ね?」

「うん、わかつた——ソフィアの気持ちいいのが終わるまで、こうしてるね」



言つてソフィアは更にショーツ型コスチュームのゴムへと手をかけた。汗で張り付いて
いるのか片手だけでは脱ぐのに少し苦労しているようだが、腰をくねらせお尻をふりふり
躍らせるように下着をずらしてゆく光景はなんとも艶っぽく官能的だ。

ようやくショーツを裸まで降ろしきると、少女は再び壁に手をつき前かがみに。そして
今一度自分のスカートをたくし上げて剥き身の美臀を曝け出す。雪色肌は龍一のスパンキ
ングに桜餅のように赤く色づいていたが見事なヒップラインは相変わらずだった。

「マスター……どうぞ、こちらにバツを——」

「えっと……罰、つて……？」

生尻を差し出された龍一は興奮しつつも彼女の言葉の意図を汲めずに立ちすくむ。

「その、ですからあ……うしろのハジメテも……マスターに、もらつてほしいの……!!」
するとブロンド少女は視線をそらし壁に指でのの字を書きながらもそう訴えてきた。

「後ろつて……まっ、まさかお尻ツ!!」

考えてもみなかった恋人からの肛交志願に、少年は思わず役を忘れて地声をあげた。

「あっ、せいけつですよ！ さっきおトイレでその……キレイに、してきましたから……」
彼の反応に改めて自分がはしたくないおねだりをしていることを自覚させられたのか、ソ
フィアは顔どころか耳まで真っ赤にしながらそんなことまで告白してくる。

「や、やっぱりリユーイチはおシリなんてきたないところ、イヤ……よね？」

いつまでも龍一が行動に出ないでいると、素に戻つたらしいソフィアは呼称をリユーイチ

チ、に戻して俯いてしまう。

「そ、そんなことないよ！ ソフィアのお尻とっても綺麗だし、僕も……してみたい！」
彼女が細かい声で漏らした諦めの言葉を、龍一は大声で否定していた。

「ほっ、ほんと……!!」

願いを聞き入れられた少女はそつと俯いた顔を上げた。そこにあつたのは悦びと恥じらいの入り混じったようなはにかみ笑いだ。

美少女コミックなら定番であるお尻でのエッチには龍一も前々から興味はあつた。でもさすがに変態すぎるか、と自分からは言い出しかねていたのだ。

ソフィアもきつと興味があつたのだと思う。そして彼女もまた自分と同じでそれを言い出しかねていたに違いない。だからコスプレだとか罰だとかにかこつけてアナルセックスに持ち込もうとしたのだろう。

(やっぱり僕らって似たもの同士、なのかな)

苦笑する龍一だが、そんな彼女のいじらしさに彼の股間もまた興奮に硬く屹立していた。「そつ……それじゃあアルシユア、犯してほしいところを自分で広げて見せてごらん」

今の自分が彼女の『マスター』であることを思い出し、龍一はごくりと喉を鳴らしつつも少し高圧的に命令してみる。

「はっ、はい——!!」

するとソフィアもまた興奮を抑えきれないように下唇を噛み締め、壁に手をつき前かが

みの姿勢をとると自らのむっちりとした尻たぶに指をかけぐいと割り開いてみせた。

むちいいいい……♡

曝け出された桃孔は相変わらず端正で。しかし同時に挿入への期待を募らせているみたいに、呼吸に合わせてひくひくと小刻みな収縮を繰り返していた。

「ほら、どこに入れてほしいのか言ってごらん」

「おっ、おシリっ……おシリの、あなに……」

「お尻、だつて？ ……マゾ奴隷がお尻の穴なんて、上品すぎるんじゃないか？」

乗ってきた龍一も思わず調教師になりきって意地悪を言いながら、目の前の美臀を人差し指でツイつと撫で上げる。

「ンアあっ♡ けっ…ケツ…ツ…ケツアナ、ですうっ…アルシユアのうっ、ウンチする

あなあっ……マスターのぶっといおちんちんでつめいっばい犯して——くださいっ♡」

HENTAIMANGAを愛好する英国少女は知り得る限りの下品な言葉を選び、繰り返し龍一に肛交をせがんできた。

「ふふ、よくできました——お望み通り、アルシユアの恥ずかしい穴をたっぷり犯してあげるからね」

ズボンを下ろして既に勃起していたペニスを取り出した龍一だったが、

（あ、でも…お尻って慣れてないとやっぱり痛いんじゃないや……？）

彼女にアナルの経験があるわけないし、無論こちらも未経験。これまで二人でエッチし

た際は何度か彼女のお尻を弄ったこともあるが、さすがに挿入は――。

「あっ…これ、ぬってください」

龍一が立ちすくんでいると、少女はコスチュームの隠しポケットから五百円玉くらいの大きさのプラスチックケースを出した。蓋にはワセリン、と書いてある。

（用意がいいなあ…っていうかトイレで綺麗にしてきた、とか言ってたし…：最初からお尻でエッチする気だったのか）

ワセリンを持ったまま突っ立っていると、まるでこちらの頭の中を見透かしたように、「だっ、だっであしたでかえるからそのまえに…リユーイチにぜんぶ、あげたかったんだもの…：!!」

真つ赤になつて顔を俯かせつつ早口で言い訳を紡ぐソフィア。にもかかわらず、彼女は紅潮した尻を突き出し肛門を晒す破廉恥ポーズをしつかりと維持したままだったりする。

なんにせよ目の前にこんな美味しそうな美尻を差し出されて放っておけるはずもない。「そっ、それじゃ挿入されるから…：力、抜いててね…：」

自身の勃起に手早く潤滑油を塗りこんだ龍一は、むにと横長に引き伸ばされた^{すあま}寿甘のような桜色の肛口にペニスの先端をあてがう。針穴のような窄まりに最初はとも入らないのではと思えたが、ゆつくりと体重をかけてゆくにつれ、敏感な亀頭の先端でじわじわと口が開いてゆくのがわかった。

「んあうっ…：すごっんひいっ…：おなかのなかつマスターのがごりごりってえっ…：んああ

っ、どんどんっ…はいつてきてます…ンううう…っっ!!」

(うわあ…：予想はしてたけど、お尻の中って…めちゃくちゃキツイっ!!)

彼女の処女を捧げられた時も狭いとは感じたが、それと比べても数段窮屈だった。まるでペニスの先を見えない指で摘まれているかのようだ。

それでも事前に塗りこんでおいたワセリンの潤滑と、肛門性交への期待でいつも以上に充血している剛直のおかげで少しずつ亀頭が孔にめり込んでいく。

「んっ…ふうあ…!!」

「いつ、痛くない…大丈夫っ?」

重い息を吐いたソフィアにすかさず確認すると、

「だいつ…じょうぶっ…：すこしおなかのおくがおもたい、けどっ…：おシリのVIRG IN、リ्यूイチにあげることできたから…：うれしいっ♥」

そう言って振り向いたソフィアは腹痛を我慢しているみたいに少し苦しそうだったが、同時にその言葉通り本当に幸せそうな笑顔を浮かべていた。

(苦しいだろうに…あんまり無理させないようにしなくちゃな)

恋人を気遣い、龍一は今まで以上に緩慢な動きで彼女の中へと入ってゆく。幸いなことに一番太い亀頭部分が通過すると、後は腰を迫り出しているだけで割とすんなり根元まで飲み込まれていった。

そうやって侵入した直腸の感触は膣とはまるで具合が違っていた。前の穴がぐにゅぐに

ゆと柔らかい、とすればこちらはツルツルとして少し固い。しかし無機質な固さではなくそれは弾力のある固さで、ペニスの先端から根元まで、竿にびっちり張り付いてくのかのようだ。前の穴に負けず劣らず熱く、そしてなにより喰い締めが尋常ではなかった。(すごいっ尻っ……食べられちゃいそうなくらい締め付けてきて……気持ちいい……!!)

直腸の圧倒的な搾精力に射精を堪えつつ、やはり心配なのはソフィアの方だ。意外なほどスムーズに挿入できたとはいえ、本来物を入れるべきでない器官。龍一は彼女の処女喪失の時を思い出して労るようにその臀部を優しく擦る。

「リ्यूイチ……おシリ、おもたいのすこしよくなってきたから……うごいていいよ？」

そんな彼女の安全宣言を受けた後も、龍一はできるだけ優しく少女の尻孔を犯すことにした。いきなり長いストロークは辛いはず——そう考えた少年は直腸を深く貫いたまま、まずは小刻みな抜き差しで孔を刺激に慣らそうと試みる。

くちつくちつ、と水気の少ない粘音が結合部から響く。一センチ足らずの往復なのに、白人少女の桃孔は肉茎が摩擦するたび嘔み付くように収縮してきて危うく射精してしまいそうになった。

「いっ……ああ……おシリっ……あつ……いい……!!」

深いところで繰り返される浅い抜き差しに、少女は手をついた壁を猫のようにカリカリと爪で引っ掻いている。

「本当に痛くない？ もっとゆつくりのほうがいい？」

少女の身を案じ、龍一は一旦抽送をやめる。疼き狂う腰を止めるのは拷問に近かったが、今は彼女への愛しさが快楽を貪りたい本能を上回った。

「だいじょうぶ……やっぱり、リユーイチってやさしい……リユーイチのそういうところ、だいすき♥」

息苦しそうな表情を笑顔で塗り潰し、少女は後ろ手に右手を伸ばしてきた。

「ねえ…手、にぎっていてもらっても……いい？」

「うん、もちろん。それじゃ、動くから辛かったらちゃんと言うんだよ？」

右手はソフィアの手を握り、左手では彼女の美臀を慈しむように愛撫しながら少年は腰をゆっくり引いてみる。

ぬぐりゆううつ……！！

するとそこは相変わらず窮屈ではあったものの、今までのような頑なさはなかった。小休止の間に腸液が分泌されたらしく、まるで潤滑油をさしたようにスムーズに動ける。

「んっ…あああ……おし……りい……マスターのっ……すぐく、かたい……ですっ♥」

龍一への呼びかけをマスターに戻した彼女の表情にも、最初のような苦悶の色は見られない。いや、それどころか少女の呻きには何かしら甘い艶めいたものすら混じっているように聞こえた。

「アルシユア、お尻犯されるのどんな感じか言っごらん？」

ゆっくりと緩慢な動きで少しずつ掘り進むように直腸を抉りつつそう問いかけると、

「んああ…はいつ、なっなんだか…ヘンなかんじ…：せなかつ、ゾクゾクして…：おしりっ…ピクピクしちやいますっ…：」

相変わらず息は浅いものの、とりあえず痛みや不快感の類はないようだ。彼女の答えに安心し、龍一は徐々に腰の動きを速めてゆく。

ぐにゅっ…ずにゅうっ…ぬちいつ…ぐちゅいいい…！！

「んおあああ…：♥ や…だっ…：なんかこれ…：」

「これ…なに？」

「そっその…：おトイレしてるみたい…：です」

少年に促され、一度は言い淀んだ言葉を恥ずかしそうに答えるソフィア。確かにアナルセックスは排泄の快感に近いとは聞いたことがあった。

「悪い子だね、アルシユアは。マスターである僕の目の前で漏らすだなんて」

「やっ♥ いわな…そんな…：はっはずかし…：やああ…：♥」

龍一の言葉に彼の前で排泄している妄想でもしたのか。ソフィアはプロンドを振り乱し、甘い香りの汗の玉を撒き散らしてイヤイヤをする。一方でその肛門はキュンキュンと龍一を締め付けており、肉先ではジュンツ、と熱いぬめりの湧き立つのが感じられた。

彼女の反応にもう遠慮は不要、と判断した龍一は彼女と繋いだ手はそのままに、腰をがっしりと捕まえて力強い抽送へと移行する。

にゅぶっ、ぐにゅいいいっ…：ぐちゅっ…：ぐにゅぶうう…！！

「んっひいっ…ンおあつ…くふうっ…ンっ…おしりっおシリとろけちゃううう♥」

つきたての餅にすりこぎを突き立てているような粘り気たっぷりの結合音が二人の繋がる場所から響き渡る。そこに目をやればペニスにびっちり張り付いた桃粘膜が引き抜くたびにめくれ上がって鮮やかな肉色を覗かせていた。

(うわあ…ソフィアのお尻の孔、いっ、いやらしすぎっ…!!)

エグいくらいに卑猥な桃孔の艶姿に見とれつつ、更に淫らに蕩ける様子を見るべく少年はより苛烈な抽送を繰り返す。すると――

ぐにゅいっ…ぬちっ、ぬちいっ、ぬぷっ…ぐぷっ…ぶぶっ…ぶぶぶうううっ!!

激しい抜き差しのために隙間から空気が入り、美肛は下品な破裂音まで響かせる。

「やだっ…こんなっ…はっはずか……しひいっ♥」

擬似放屁に恥ずかしがるソフィアだが、むしろ龍一はそんな彼女の可愛らしい恥じらいようにますます興奮。腰を繰り返す、ぱんっぱんっとな激しい音を奏でつつ直腸を貫き、粘膜をこそぎ、奥の奥までほじくり返す。

暴れ回るペニスを啜えた腸壁も、最初に感じた固さはなくなり、溶けたゴムみたいにもつちりと柔らかな弾力が竿全体を包み込んでいる。

「くうっ…、もうすぐ射精すぞっ…お前のっお腹の中に…!!」

こみ上げる喜悦に間近に迫った限界を悟り、姫尻をほじくり返しつつ龍一が呻く。「どうぞ…アルシユアのおなかにいっ、ザーメンいっばいそそいでくださいっ!!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは、全編の方向性まできまっています。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!